



Title	初期のシンガーミシン裁縫女学院の型紙教育 : 明治41年の実物型紙による検討
Author(s)	池田, 仁美
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初期のシンガーミシン裁縫女学院の型紙教育

— 明治41年の実物型紙による検討 —

池田仁美／武庫川女子大学大学院博士後期課程

はじめに

本研究の研究対象であるシンガーミシン裁縫女学院（以下裁縫女学院）とは、明治期にミシン裁縫に特化した洋裁教育を行った私立学校である。明治33（1900）年に日本に進出したシンガーミシン社が、ミシンの販売と宣伝を兼ね、明治39（1906）年に東京市麹町区有楽町壱丁目五番地に設立した。設立者は、シンガーミシン会社極東支配人である秦敏之、院長はその妻の秦利舞子である。本研究は、設立期の裁縫女学院において、新たに構築されたと考えられるミシン裁縫に特化した裁縫教育に関する系譜を導き出し、洋裁教育史の確立の一端を担うことを目的とする。

ミシン裁縫教育について

裁縫女学院の設立以前にも、ミシン裁縫の指導はおこなわれていた。渡邊辰五郎による「東京裁縫女学校」の生徒が授業で製作した教材からなる『渡辺学園裁縫雛形コレクション』（2001）の、明治30（1897）年の教材には、部分的にミシン縫いが確認できる。渡邊は明治14（1881）年、東京女子師範学校の裁縫科教員をつとめ、同時に「和洋裁縫伝習所」を設立した。明治25（1892）年、「和洋裁縫伝習所」は「東京裁縫女学校」に改称し、現在の東京家政大学の前身にあたる。渡邊は、「雛形尺」による雛形の製作を代表とする裁縫の一斉指導の教育法を考案した。裁縫指導は手縫いを主とし、ミシン裁縫は一部に取り入れられた。

一方、裁縫女学院は、女子を対象としたミシン裁縫による洋裁教育を展開することを前

提として設立された。設立期の裁縫女学院では、院長の秦利舞子による裁縫教育がおこなわれた。

秦利舞子によるミシン裁縫教育

明治39（1906）年の公文書「私立学校院長就任届」に添付された秦利舞子の履歴書を参照すると、院長就任以前は明治30（1897）年に女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）を卒業した後、盛岡や東京の高等女学校で教師をしており、利舞子が国外で洋裁を学んだ形跡はない。利舞子が学んだ女子高等師範学校では、明治19（1886）年までの期間に渡邊辰五郎が裁縫科教員をつとめており、渡邊の退職後は、「東京裁縫女学校」で渡邊の指導を受けていた谷田部順子が担当した。したがって、利舞子が受けた裁縫教育も渡邊式であったことが示唆される。そこで、利舞子の著書から、渡邊式との関連の有無を確認した。資料は、秦利舞子『みしん裁縫ひとりまなび』（1909）と、渡邊辰五郎『裁縫教科書』（1897）である。

『みしん裁縫ひとりまなび』のシャツの製図を参照すると、型紙を用いず、直線の構成による縫い代を含む裁断線を布に直接書き入れる方式である。寸法は平均寸法によるもので、個人の体格差の考慮はしておらず、平面的なパーツ構成が特徴である。これらの特徴は、渡邊が指導したシャツの製図と共通するものであり、『裁縫教科書』にも同様の製図を確認することができる。裁縫女学院の明治40（1907）年の学則に記載された教授細目と照合すると、『みしん裁縫ひとりまなび』に

記載された製作物は、主に普通科の指導内容と合致することが判明した。

明治41年入学生の授業資料

設立期の裁縫女学院の指導内容を窺い知るもう一つの資料として、明治41（1908）年に裁縫女学院に入学した山口ツルによる衣服型紙58品目と授業記録ノート25品目がある。山口は明治41（1908）年から翌年12月までの期間に、ミシン裁縫の普通科・高等科・師範科に在籍していた。山口の衣服型紙は『みしん裁縫ひとりまなび』の平面的な製図とは異なり、曲線で構成された立体的な製図である。製図の要所には身長と胸囲による割出式が記入してあり、割出式で導いた基礎線によって肩や脇の位置を特定し、輪郭線を描く。この基礎線は、身体の形状を計算理論によって導き出したものであり、衣服製図の骨格としてその形状を特徴付けるものであると言える。

なお、裁縫女学院の学則（1907）の教授細目を参照すると、山口の衣服型紙は、高等科及び研究科の教材であったことがわかった。また、山口の衣服型紙の名称は、男子洋服18点のうち12点、女子洋服21点のうち11点が、「東京裁縫女学校」高等科洋服製図及び裁縫教授細目（1909）と共通していることが判明し、「東京裁縫女学校」との関係が示唆された。

衣服型紙教材の製図の元となった洋裁教育

山口の衣服型紙の基礎線の構造に着目して、その形状と割出式が共通する製図を記載した洋裁書の特定を試みた。その結果、渡邊滋『洋服裁縫教科書』（1904）の「フルドレスヴェスト」は、山口と同一の製図理論によるものであることが判明した。渡邊滋は、渡邊辰五郎の長男である。同書の序文より、製図は「米国留学中研究したるシーゼストーン氏の方法」である。『東京裁縫女学校一覧』

（1909）によると、渡邊滋は、明治33（1900）年に歐米服装研究のため米国へ留学し、シカゴ市チャールズ、ジェー、ストーン裁縫学校等で洋裁を学んでいた。その裁縫学校は、“The Chas. J. Stone Co. Cutting School”であると推定できる。講師のStone（ストーン）の6冊の著書に記載された製図と、山口の衣服型紙製図を照合すると、*Stone's New Superlative Coat and Vest System, 1900*に記載された「フルドレスコート」など4点の製図が共通していることが判明した。このことから、山口の衣服型紙の製図法は米国のストーンの考案によるもので、渡邊滋によって日本に持ち込まれたものであったことが示唆される。

裁縫女学院設立期の指導内容の系譜

裁縫女学院でストーンによる立体的な特徴を持つ製図の指導にあたった人物については、「東京裁縫女学校」の卒業生で、裁縫女学院の主任教師をつとめた矢野はじめ子であると推察できる。矢野は、『みしん裁縫ひとりまなび』の編纂にも尽力しており、このことから、渡邊辰五郎と渡邊滋の両氏から指導を受けていたと思われる。山口の衣服型紙のうち、研究科の衣服型紙には、矢野の検印が押されており、実際に山口の授業を担当していたことが窺える。

以上の調査結果より、設立期の裁縫女学院の裁縫指導は、渡邊辰五郎から谷田部順子を経て、渡邊式の裁縫教育を受けた秦利舞子が平面的な製図の指導をした普通科と、米国ストーン氏から渡邊滋を経て、矢野はじめ子が立体的な割出式製図の指導をした高等科・研究科で構成されたという系譜が浮かび上がった。設立期の裁縫女学院では、ミシンの使用法だけでなく、渡邊辰五郎と渡邊滋の裁縫教育の流れをくんだ指導者による型紙製図の指導がおこなわれていたと言える。